

伝えるのは命 繋ぐのは命



旭山動物園 園長

ばんどう げん
坂東 元

【略歴】

1986年 酪農学園大学酪農学部獣医学修士課程卒

同年5月 旭川市旭山動物園就職

1995年 飼育展示係長

2004年 副園長

2009年 園長

平成9年の「こども牧場」から「ペンギン館」「あざらし館」「ちんぱんじー館」「レッサーパンダ舎」「エゾシカの森」「きりん舎かば館」などすべての施設のデザインを担当、数々のアイデアを出し具体化してきた。また手書きの情報発信やもぐもぐタイムなどのソフト面でも係の中心となり具体化、システム化を図ってきた。

現在は、えぞひぐま館の建設を終え、環境保全活動の充実を目指している。

ボルネオでの活動も本格化しており、マレーシア国サバ州での野生生物レスキューセンターの建設に着手し第一期工事を終え、二期工事の準備中。

【著書】

動物と向きあって生きる 角川学芸出版

旭山動物園へようこそ 二見書房

夢の動物園 角川学芸出版

ヒトと生き物 ひとつながりの命 道友社

など

命は大切、このことばを否定する人はいないと思います。だけど私は「命が大切＝生きていることが大切」なのではなく、「生き方」が大切なのだと感じます。命は誕生した時から死で終わる運命です。治療しようが延命しようが必ず死は訪れます。誕生も死も病院で営まれるようになり、日常ではなく特別なことのようにとらえられがちで、身近で目にすること、感じるができなくなっています。死はマイナスのイメージがつきまとうようになりましたが「死を大切」にできなくて「命を大切」にはできないとも感じます。命とは、誰にでも等しく宿るのだから生きてるうちは生きるという実にシンプルなものだと思います。

私たちヒトは、地球上のすべての生き物の中で、ただ一種だけに通用する価値観、ルールを作り上げ、全く異なる生き方をしています。医療もその一つでしょう。そしてヒトはすべての生き物の中で一番すぐれている生き物なんだとどこかで思っています。その中でただ一種だけが無限とも思える勢いで増え続けているという一面があります。

ではヒト以外の命はどのように生まれているのだろうか？食物連鎖と言う言葉があります。食物連鎖は命の連鎖、バトンタッチです。死が必ず生に受け継がれ、何一つ無駄になるものはありません。たくさんの死があるからたくさんの命が輝くのです。すべてが循環しているから、何も足さないのに春になると木々が緑に被われ、虫たちや小鳥たちが命を育みます。多種多様な生き物が空間を共有して生きている、命を奪う側奪われる側の生き物が同じ空間で生きている。それは仲良くではなく、認め合うことです。私が動物たちを常にすばらしいと感じるのは、自分にとって不愉快な存在でも存在を認め合えることです。

しかし動物園の動物たちは、食物連鎖の環から持ち出された野生動物として存在しています。ある意味終わるタイミングを失った命です。病気、医療という概念を持たない動物たちですが、ヒトの生命観の中で一生を過ごすことになります。ここに関わる私たち、特に医療行為を行うことの葛藤が生じます。

安全これもすべての大前提のように言われるようになりましたが、絶対に良いことではない一面があります。高さが17メートルあるオランウータンの施設は、手を滑らせれば死に繋がる危険な環境です。でもその高いところを腕渡りする姿が生き生きとした姿として多くの来園者に感動を与え、オランウータンのペアの関係の強化、親子の絆の強化に繋がっています。

命は、常に次の世代につなぐために存在しています。今を生きるものが今をとりつくりようことだけを考えるようになっては、未来はありません。旭山動物園は飼育動物の命を繋ぐことを目標に、日々の飼育に取り組んでいます。